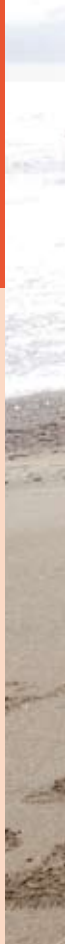


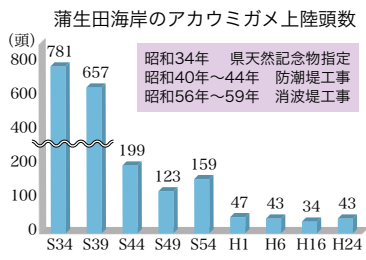
阿南 ぶらりまち紀行

ふるさと「阿南市」のすばらしい魅力を再発見!



四国最東端に位置する蒲生田海岸は、全国でも有数のアカウミガメの産卵地として知られている。産卵シーズンは、砂温が上がり始める5月下旬から8月にかけて。昨年の上陸頭数は43頭（うち産卵22頭）と県内最多を誇った。前後の足を力強くかき分け産卵する姿は何度見ても息をのむ。そんな神秘的な光景を誰よりも身近で見守ってきたのが蒲生田地区常会の皆さんだ。ウミガメが上陸する蒲生田の海を地域の誇りとして、長年にわたる環境保護に力を注いできた。

蒲生田海岸は、日本のウミガメ研究の発祥地の一つで、昭和29年から60年間にわたり、毎年上陸・産卵調査を続けている世界で唯一の海岸である。それまで謎とされていたアカウミガメの太平洋回遊（日本とカリフォルニア半島間約2万キロ）の事実を確証させた場所でもあり、阿南市が世界に誇る貴重な自然文化遺産といえる。しかし、その歴史に連綿と刻まれた数値は、人と自然との共生の難しさを物語っていた。



常会長の岡本憲治さん(66歳)は語る。「防潮堤や消波堤が整備されたことで、海辺の環境変化が著しく進みました。今となつては、昔の砂浜に戻すことはできませんが、少しでも産卵しやすい環境を整えようと、海岸清掃や重機を使った除草作業などに取り組んでいます。ただ、高齢化が進む地域の力だけでは限界があります。世界に誇る蒲生田の海を次の世代に受け継ぐためにも、こうした現状を知っていただき、環境保護の仕組みづくりを一緒に考えてほしいです」。

平成23年1月、ウミガメ保護活動に取り組む椿町中学校が環境大臣表彰を受けた。昨年から、KITT賞賛推進会議の呼びかけで清掃活動が行われている。蒲生田の海を愛する人々の心の温もりが子ガメを育て、30年にも及ぶ大回遊を経て再び蒲生田の海に帰ってくる。ウミガメを巡る物語の結末は、そんなハッピーエンドであつてほしいと、潮騒に耳を澄ませながら神秘的ロマンに思いを馳せてみた。

